

説教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田禎一郎

2018年8月5日（日）

主 題：「だまされないように」（1）

—誘惑に負けないために—

テキスト：ヤコブの手紙1章12－15節

はじめに

- ・この世の中、善人ばかりでなく、悪人もいます。本日の説教テーマである「だまされないように」と聞くと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか・・・。
- ・そうです。「オレオレ詐欺」ですね。社会でこれほど、その危険性が叫ばれているにもかかわらず、未だに被害者はいるのが事実であります。
- ・警察庁の発表によれば、2018年1月から5月までの総被害額は、なんと145億5千万円です。前年度に比べ、被害件数は約29%増加したとのこと。真に残念なことですね。
- ・次に「だまされないように」と聞くと、実際自分が被害者となった経験を思い出される方もおられるかも知れません。とても辛い経験をされたと思います。大変残念ですが、だます人は昔も今もいるのです。そこで、今日は「だまされないように」と、題して考えてみたいと思います。
- ・まず初めに、この手紙の書かれた背景をもう一度考えてみましょう。
- ・この書簡の著者ヤコブは、イエスのじつの弟と言われています。小さい時から、イエスと一緒に育ち、イエスを通していろんなことを見聞きし、体験した人でした。この手紙を読んでいくと次第に、そのことが分かってきます。この手紙には、そういう境遇の人でなければ書けない、生活に関係したことや実際的な教えが多く出てくるからです。
- ・それから、この手紙が書かれた時期は、紀元約60年でした。新約聖書の中でも早い方だと言われます。キリスト教会がスタートして、まだ時間がそう経っていないころです。その当時の教会には、2つの大きな課題が出てきたと思われまます。
- ① 教会に迫害の手が伸び、試練下に置かれた
 - ・前回にも語りましたが、外側からの迫害の手が伸びてきたことです。キリスト教に対する弾圧が始まり、クリスチャンが次々に捕えられ、殺されるという時代でした。そういう試練の中で、主に対して、信仰に対して、疑いが生じたり、弱気になった人たちが出てきました。
- ② 信仰から脱落していく人々が出始めた
 - ・もうひとつ、この時代の教会が直面した問題は「誘惑」という問題でした。
 - ・クリスチャンになっても、すぐにこの問題にぶつかり、そして負けてしまう人がいました。その結果として、教会から離れてゆく人、信仰から脱落してゆく人が出てきました。
- ・皆さん。初代教会は聖霊に満たされ、導かれ、前進した時代でしたが、信仰を失ってし

もう人たちもいたことは事実でした。そしてこれが、教会がぶつかったもう一つの新しい課題でありました。ヤコブは、試練について書くとともに、誘惑という問題についても、書かずにはいられなくなったのではないかと思います。

- ・試練と誘惑、それはコインの表裏のようで、質の違う兄弟のようです。ある時は、自分が直面している問題は、試練なのか誘惑なのか区別がつかないようなことがあるでしょう。みことばは、次のように勧めています。

1:16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。

- ・ヤコブは、この大きなテーマについてどのように勧めているのでしょうか。

2点

大切なポイント

1. 試練に耐える人への約束

1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

- ・著者は1章2～11節までで、外側から来る試練について書いてきました。しかし今日のテキストでは、誘惑や試練の問題に入る前に、試練を耐える者への「ごほうび」（祝福）について書いています。それは2つの祝福のことです。ひとつは地上生涯で経験する祝福です。もうひとつは、死後の世界で与えられる祝福です。

① 地上生涯で経験する祝福とは、「内的に味わう幸せ」のことです。

「試練に耐える人は幸いです。」とありますが、「幸い」とは「神にある幸いな立場」のことです。その立場にある人は、必然的に内面的な平安を味わうこととなります。

- ・その内的平安は、外的な状況によって左右されるものではありません。なぜなら、それは神を信頼するところから来る平安（幸い）であるからです。

イエスは、その大切なことを教えられました。マタイ5章

5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

5:4 悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

5:5 柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。

これらの「幸い」は、さらにつづく「山上の垂訓」（八福の教え）として記されています。（黒田禎一郎著“ヒズブレッシング”を参考にしてください）

- ・試練を耐える者には、もうひとつの祝福があります。

② それは死後の世界で与えられる祝福で「いのちの冠」のことです。

その冠は、王であるキリストが被る王冠とは違います。これは患難に勝利した者に与えられる冠のことです。ヨハネ黙示録では「いのちの冠」について記されています。

2:10 死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

- ・死に至るまで忠実であった者はもちろんことですが、ヤコブは試練を耐える者にも、次のように約束が与えられていると言いました。

1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

- 私たちにはやがて、「いのちの冠」が約束されています。キリストを愛し、その愛のゆえに試練を耐え抜き、地上生涯においては内的平安（祝福）を受けることができます。そして死後の世界では、「いのちの冠」を受けることが許されているのです。何という幸いではありませんか。それは神の恵みです。私たちは人生の先に希望を置き、日々忍耐をもって、信仰によって歩みたいと願います。
- 著者は、今日のテキストでもう一つ大切な「誘惑」について述べています。

2. 誘惑の源を知りなさい

1) だれでも誘惑に会う

1:13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。

- 誘惑はだれでも受けるものです。オレオレ詐欺の被害者の多く、自分は大丈夫とっていたそうです。熱中症で手当てを受けた多くの方は、自分の体力に自信があり大丈夫だ、と思っているそうです。そうです。私を含め、自分は大丈夫と知っているところに、問題があるようです。誘惑をかける相手は、私より強いのです。
- ある人は、クリスチャンになれば、もう大丈夫と考えます。あるいは信仰が成長すれば、誘惑に会っても大丈夫と思いきや、誘惑に会うのは、信仰がまだ浅いからだ考える人もいます。
- しかし、著者は「だれでも誘惑に会ったとき」と言いました。誘惑は、信仰の年数や成長と関係なく、それなりに、だれでも誘惑があります。信仰が高められれば、高められるに従い、誘惑はあります。イエスも公生涯のはじめに、「誘惑の山」で3度にわたり、誘惑を受けられました。そして、その3度の誘惑に対し、すべて勝利されました。
- イエスはその生涯で、常に誘惑を受けられました。しかも十字架刑の直前まで続きました。いいえ、十字架の上においても誘惑を受けられました。カルバリの丘の犯罪人の1人は、イエスに何と言ったのでしょうか。ルカ 23章
23:39 十字架にかけられていた犯罪人のひとりイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。
イエスは最後の最後まで、誘惑をお受けになりました。

- 皆さん。私のような小さな者にとっても、誘惑はあります。仮に「今日の説教はすばらしいでした！」と言われるならば、不愉快な気分にはなりませんね。しかし、仮にその回数が増してくるならば、だんだんと高慢になってしまいます。適度の感謝の言葉は人を生かしますが、過度の感謝の言葉は誘惑にもなりかねません。
- これは有名な話しです。英国の著名な聖書学者スポルジョン師が、説教を終

えた後、一人の婦人がやってきて言いました。「先生！素晴らしい説教でしたね」スポルジョンは、これに対してこう答えたそうです、「サタンもそう言います。」この言葉は文化的背景が異なりますから、日本で同じように「サタンもそう言います。」と言ったら、その方に大変失礼となりますから、注意が必要です。要注意！！

- とにかく、私たちには絶えず誘惑があります。信仰者として歩んでいくとき、先ずその自覚が大切です。

2) 神は人を誘惑しない

1:13 **だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。**

- 日本語で「試練」、「誘惑」と訳されている語「ペイラスモス」(peirasmos)には、2つ意味があります。

① 外側からやってくる攻撃 ⇒ 試練

② 内側からやってくる攻撃 ⇒ 誘惑

ヤコブは②の「誘惑」という問題を取り上げています。

- 先ず覚えないことは、神は誘惑の源ではないことです。なぜなら、神の本性(性質)がそれを許さないからです。神は悪に誘惑される方ではありません。神は悪と無関係であり、悪を経験したことのないお方です。ですから、人を誘惑するようなこともありません。

- ただし、だれかが人に誘惑をかけることを許されることはあります。

旧約聖書ヨブ記をお読みください。ヨブは神を恐れた忠実で敬虔な人でした。

しかし神は目的をもって、ヨブに試練と誘惑がかかることをお許しになりました。

- ヨブの生涯を学ぶならば、私たちはどのように「誘惑」に勝つことができるかを知ることができます。それは又、別の機会に学びたいと思います。
- 皆さん。私たちはひとつの誘惑に勝ったとき、間違いなく自分の信仰は強くされます。この経験はとても大切です。誘惑はだれにもあります。では、仮に誘惑に負けてしまった際は、どうすれば良いのでしょうか？

⇒速やかな事後処理です。

その原因がどこにあったか反省し、悔い改め、主から赦しを得ることです。主は喜んで手を差し伸べてくださいます。

3) 人の内側に問題がある

1:14 **人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。**

- 一般的に、私たちには誘惑がかかるときは、次のようなステップが考えられます。

① 人の内がわに「欲」があります(「欲」自体は、決して問題ではない)。

② その「欲」におびき寄せられることが「誘惑」となります。

人間は習慣的に「欲」によって、おびき寄せられるものです。それはまるで、魚を釣り上げるような餌のようなものです。しがって、餌につられてしまう魚のようにならない

ために、常に靈的に目を覚ましている必要があります。

つまり、欲が貪欲となつてはいけません。

- ③ 誘惑に同意した瞬間、「欲」がはらみ、「罪」を生みます。

1:15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

ここでは「欲がはらむと」と出産のときのイメージが使われていますね。誕生した「罪」は、どんどん成長していきます。それは驚くべき速さです。ですから、罪の処理はできるかぎり速く行うべきです。

- ④ 成長した「罪」は、やがて「死」を生みます。

「欲」は「罪」の母であり、「死」の祖母となります。このように人間は、欲、罪、死という課題を生まれながらにして担っているのです。死は肉体的な死ですが、罪が赦された人にとっては、永遠の神の御国に入るステップです。

- 皆さん。罪の処理は罪を赦す権威をもつ神の前で行わなければなりません。

それはイエス・キリストの前で、罪を告白し、悔い改めることです。イエスが十字架上で流してくださった御血は、その汚れた罪をすべて洗い流し、聖くしてくださいます。

1 ヨハネ1章

1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

- このように、「欲」が「貪欲」となり「罪」を生み、そして「死」に至らせてしまいます。これらは人の内側で起こる問題です。私たちは誘惑の源は、どこにあるか明白に知る必要があります。それは誘惑に負かされないためです。

- 多くの場合、私たちは誘惑によって「だまされてしまう」ことがあります。ですから、いつも注意が必要です。著者は初代教会時代の聖徒たちが、誘惑に「だまされないように」と、忠告を与えました。現代もまったく同じではないでしょうか。

- いかがでしょうか。私たちは誘惑を受けてはいないでしょうか。

では、誘惑を受けて、「だまされない」ためには、どうすれば良いのでしょうか？⇒常に目を覚まして、神とともに歩むことです。神は誘惑から守り、助けてくださるお方です。

ま と め

主 題：「だまされないように」(1)

—誘惑に負けないために—

- 今日、私たちは大切なことを学びました。信仰生活には、必ず誘惑と試練はあることです。しかし著者は次の点を勧め、また忠告しています。

1. 試練に耐える人は「いのちの冠」を得る
2. 誘惑の源を知りなさい
 - 1) だれもが誘惑を受ける
 - 2) 神は人を誘惑されない
 - 3) 人の内側に問題がある

* God bless you!